

#### D. 考察

全体の相談件数、対面相談件数の増加は、開院後3年目になり、当病院の患者や家族の利用者が増加してきたことや広報（リーフレット配布、ホームページ掲載、受診案内・入院案内への掲載）の効果と考えられる。広報の効果については、マスメディアでとりあげられたことが電話相談のきっかけとなっている方もみられることから大きいと考える。

また、これまでの推移をみていると、診療に関することはやはり多いが、悩みの実態調査で多かった就労や経済的負担、あるいは不安などのこころの問題の相談も増加しており、相談口に寄せられる相談自体も多様化傾向にあると考えられる。

一方、不安などのこころの問題の内容をみていくと、「精神的動揺・絶望感」が一番多いことや、インフォームド・コンセント（以後、IC）後にこのような精神的な変化を感じ相談される方が多いことから、IC後のケア、特に医療者の眼の行き届かない外来診療でのIC（特にBad NewsのIC）後のアセスメントやケアが重要であると考えられる。

#### E. 結論

現在相談窓口を設置する病院が増加しているが、相談室があっても利用者が利用しやすい状況になっていなければ、十分な役割は果たせない。

1)利用者が相談窓口の存在を認知できるように十分な広報を行うこと、2)相談に対するしぼりはできるだけしないこと（対応が可能な相談内容の種類をあらかじめ明示するより、まず受け入れる、聴くという姿勢での対応）が重要である。

また、がん専門病院で日常的に行われるBad NewsのIC後の、精神的動揺や孤独感などのこころの問題の相談が多いことから、精神面でのフォローアップのためのスキルや継続ケアを含めた相談体制などの検討も必要である。

#### F. 研究発表

##### 1. 論文発表

(1) 石川睦弓、他 成人看護学シリーズがん看護学—がん医療の動向、自己決定、ヌーヴェル・ヒロカワ（印刷中）

##### 2. 学会発表

なし

#### G. 知的財産権の出願・登録状況（予定含）

##### 1. 特許取得

なし

##### 2. 実用新案登録

なし

##### 3. その他

なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

臨床心理士の立場から見た、がん生存者のケアに関する研究

分担研究者 小池 眞規子 目白大学人間社会学部 心理カウンセリング学科 教授

研究要旨

がん生存者の気分状態を測定するための簡便な尺度の作成を試みるため、本研究では、気分を測定するための線画を選定した。24歳以下の女子大学生を対象として、Sarbin & Hardyck (1953)が考案した20の線画について、Sensory Pleasure 因子と Activity 因子 (柏木、1963) に基づくイメージ調査と気分調査票 (坂野ら、1994) を実施した。その結果、クラスター因子分析により6種類の線画が見いだされた。6種類の線画は気分調査票の得点 (特に、疲労感と抑うつ因子) と関係していることが示唆された。本研究により、6種類の線画カードを利用した気分線画評定尺度 (Mood Figure Assessment Scale) 作成のための基礎的資料が得られた。

A. 研究目的

本研究では、質問紙に回答することが困難な人を実施したり、短時間に繰り返し実施したりすることが可能な簡便性の高い気分測定尺度を考案することにした。本研究の目的は、気分を測定する最適な線画カードの選定とその基礎的資料を集積するための基礎的研究である。

B. 研究方法

158名の大学生を対象に、Sarbin & Hardyck が提唱した20の線画について、Sensory Pleasure 因子と Activity 因子 (柏木、1963) に基づくイメージの類似性を調べる質問紙と気分調査票 (坂野ら、1994) を実施した。分析対象は、24歳以下の女子大学生で、未回答項目があった5名の被験者を除いた115名とした。

(倫理面への配慮)

アンケート調査への協力願いと、調査への協力は任意であり、回答資料はすべて集団として扱い個人を特定するものではないことを書面で説明した。

C. 研究結果

1) 20個の線画についてのイメージに基づいたクラスター分析から、線画を6類型に分類することができた。本研究では、選択数を基準にして、各群の線画の中から代表的な線画を便宜的に1個選定した。

2) 選定された各線画のイメージ得点との関係から、各線画の特徴をみた。Sensory Pleasure 因子の7項目の平均値の最大値と最小値を基準にして、その値の小さいものから6線画を並べた。値が高いほど、「愉快的、楽しい、あかるい、気持ちのよい、やわらかい、すきな、白い」という傾向を表しており、いわば「気分が高揚している」こと

を示している。

3) 線画と気分調査票 (坂野ら、1994) の得点傾向から、各線画の特徴をみた。

D. 考察

1) 6線画が Sensory Pleasure 因子に関して、一定の順序付けが可能であることが示唆された。

2) 気分調査票の得点傾向と各線画との間には、気分評価に関して一定の関係があることが推測された。

E. 結論

視覚的な情報から気分の状態を測定する方法として、本研究で選定した線画が利用可能であることが示唆された。今後、選定した線画と気分との関係をより多面的に研究する必要がある。本研究では24歳以下の女性を被験者にしたものであったが、男性を含めて、子どもや高齢者などを対象にしたデータを集積し、がん生存者のケアへの臨床的応用を進める予定である。

F. 研究発表

1. 論文発表

渋谷昌三、小池眞規子、藤巻貴之・気分線画評定尺度 (MFAS) 作成のための基礎的研究・目白大学心理学研究創刊号 (印刷中)

2. 学会発表

なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

平成16年度分担研究報告書

がん患者・家族のニーズと生活援助の在り方に関する研究

分担研究者 高田 由香 静岡県立静岡がんセンター よろず相談 主任技師

研究要旨

本研究は、患者・家族が求める医療費・社会資源、在宅療養サービスなど療養生活に必要な情報提供の在り方を、学習会という実践を通して検討することである。がん専門病院における医療ソーシャルワーカーの役割自体まだ確立されていないことに加え、マンパワーも充分とは言い難い状況の中で、一度に多くの利用者に情報発信する方法の確立が急務と考えている。そこで定期的に学習会を開催することにより、患者・家族が求めている情報へのニーズを調査し、情報提供・生活援助の在り方を検討する。

A. 研究目的

情報提供の方法として行われる学習会に、患者・家族が参加することによって、医療費・社会資源、在宅療養サービスなどの療養に必要な情報や相談窓口の存在を知ることが可能になる。そして主体的な相談行動を起こすことで、病気やそれに伴って生じる多くの生活問題を自ら解決しようとする動機付けにもつながると考えた。

B. 研究方法

月2回の学習会を開催する。同一テーマで2回、開催曜日を変えて多くの患者・家族が参加しやすいように配慮した。1回30分程度の講義（パワーポイント使用）と、その後の質疑応答。毎回、資料配布を行い、情報の確認やよろず相談にアクセスしやすいように配慮した。広報の方法としては、各専門診療科受付など（計20カ所）でのリーフレット配布、ベッドサイド端末、各デイルームや病棟掲示板へのポスター掲載、当日の院内放送、ホームページなどを通しておこなった。

（倫理面への配慮）

今回は予定していたアンケート調査は、倫理審査委員会の審査に提出が難しかったため、実施しなかった。参加者の匿名性を重視し、参加人数のみ確認をおこなった。

C. 研究結果

平成16年11月から平成17年3月まで、計10回の学習会を企画・運営した。参加者は延べ182名で、そのうち女性が6割強であった。テーマごとの参加状況をみると「高額療養費制度の紹介」計56名、「医療情報の入手のしかた」計21名、「自宅での療養生活の工夫」計18名、「医療費控除のしくみ」計74名、「在宅で受けられる医療・介護サービス」13名という結果で、経済的問題に関する内容の時は参加者が多かった。在宅療養に関する内容の時は、退院をひかえた家族の参加があり、それぞれのニーズにあったテーマへの

参加状況がうかがえる。学習会の開催については、リーフレットや院内放送で認知した参加者が多かった。

D. 考察

患者・家族の求める情報の中でも共通した話題として経済的な問題への関心が高い傾向がみられた。その一方で制度のしくみが複雑でわかりにくいことから、理解や利用が十分されていない傾向にある。今回の学習会を通して、制度の概要や利用方法についてのアナウンスの機会となった。参加者からは具体的な利用方法や解釈についての質問が多く、個々のニーズに合ったきめ細かい情報提供を求めている実情も確認できた。また、よろず相談の存在や利用方法について周知することができ、学習会参加者が個々の相談について直接電話や対面の相談を利用されるという、主体的行動につながった。今後のプログラム作成にあたっては、多くの患者・家族を対象としたテーマ以外にも、より限定された対象者向けの専門的なテーマであっても、ターゲットを絞った広報により、一定の参加が得られると考える。

E. 結論

患者・家族は、自分たちの治療や療養生活に現時点で必要と認識しているテーマに対しての関心が高い。また療養に役立つ有益で利用可能な制度やサービスの情報を必要としている。

F. 健康危険情報 なし

G. 研究発表 なし

1. 論文発表

「治療」2005年87巻4月号

特集「がん治療後の患者ケア」

がん患者のためのソーシャルワーク

2. 学会発表 なし

H. 知的財産権の出願・登録状況 なし